

ひとの認識と「変わらない」発話：

人生における変化にかかわるトークの研究¹⁾

南 保輔

論文要旨

学生時代からの知り合い同士である成人女性のグループに、大学の卒業アルバムを見ながら「思い出おしゃべり」をしてもらった。「人生における変化」が話題となるか、なるとするとどのようなかたちのものであるかを調べることを目的とした。本論では、40代3人組のセッションの結果を報告する。共通の知人の写真をグループで見るときに、人物の同定と認識が連鎖を開始する位置でおこなわれていた。写真の容貌について「変わらない」という発話が見られた。中学校時代から保持されている「記憶画像」と比較照合されていると推定された。「内面」の変化に関わるやりとりは1例見られたが、「変わった」という表現は使われず、対比は暗示的に示されるのみであった。セッション後のインタビューにおいて、大きな変化を語る場面としては職場の後輩に相談されたときが想定されるという回答が得られた。人生における変化にかかわるトークの自然な生起を収集する場面を特定することの困難さが確認される結果となった。

キーワード：人生における変化、「変わらない」発話、マルチモーダル相互行為分析、思い出、写真を見ること

1 人生における変化にかかわるトークの研究

人生における変化にたいして、社会科学的研究としてどのようなアプローチが可能だろうか。南は、北米に住んでいる日本人の若者との調査インタビューにおいて、「(わたし) 変わったよね」という発話を引き出した (Minami 2007)。当時大学生だったこの女性は、幼いときに父親の海外駐在にともなって北米暮らしを始めた。その後ずっと北米で暮らしていたが、中学高校時代のある時期には日本に帰ることを強く望んでいた。毎日「わたしは日本へ帰る」と言っていたという。それがあるときを境に「急に」言わなくなった。そのときのことを思い出して「変わったよね」と、インタビューに同席していた母親に確認を求めるように問いかけたのである。そして「変わって良かったと思ってる」と続けたがそれは、大学生となったこの発話時点で北米に残って良かったと考えていることを主張したものであった。

1) 2023年度成城大学特別研究助成の成果である。調査協力者のみなさんに大いなる謝意を表する。2024年度南ゼミナール生からは分析にかかわる助言をもらった。記して感謝する。

人生における変化、あるいは転機（ターニングポイント）にアプローチしようとする、このような自己報告のトークにたよることになる（そのような研究例としては南 2017 を参照）。家族や親しい知人でなければ、人生における「変化」を客観的に観察できる程度までにある個人を長く知るということはずかしいからだ。

本論では、「思い出おしゃべり」調査の結果から「変化にかかわるトーク」の事例を紹介し検討する。互いに知り合っている期間が長い女性のグループに昔の写真を見ながら「おしゃべり」してもらおうというセッションを設定してデータ収集をおこなった。

2 方法

調査協力者は都内 Z 大学の卒業生である。元同級生 3 人組で 2 時間ほど大学の卒業記念アルバム（以下、「アルバム」）を見ながらおしゃべりをしてもらいたいとメールなどで調査協力を募った。このときに、論文末に付録として再録したものなど 3 つの文書を配布した。2 時間ほどのセッションで交通費込みの謝金を支払う条件とした。2023 年 12 月から 2024 年 3 月にかけて 7 回のセッションを実施した。3 人組が 4 セッション、2 人組と 4 人組、そして 1 人というのが 1 セッションずつとなった。1 人のときは「思い出おしゃべり」セッションとはならず、著者とのインタビューというかたちになった。

本論では、初回となる 3 人組のセッションを取り上げる。協力者は 40 代の女性で、A、B、C とする。Z 大学を 2000 年代前半に卒業している。C は Z 大学の系列校に小学校から在学した。A と B は中学校からで、高校、そして大学に在学した。ほかのセッション参加者は、大学進学時点で Z 大学に入学した学生ばかりだったので、この点は特徴的である。3 人ともに既婚者で子どもがおり、セッションの時点ではフルタイムで働いていた。

セッションを実施したのは幅 3 メートル、奥行き 7 メートルほどの長方形の部屋である。そこに置かれた長方形のテーブルにカメラから見て右に A、正面に B、左に C と着席した。これを iPhone を含むビデオカメラ 4 台と IC レコーダ 2 台で記録した。右と左は着席した 3 人の頭よりやや高い位置から見下ろすようにビデオカメラ（右カメラはソニーの FDR-AX45、左カメラはキャノンの XA25）を三脚（ダイワ DST53）を使って設置した。そして、3 人の正面前方の高い位置からテーブル上を見下ろすようにビデオカメラ（ソニーの FDR-AX60）と iPhone Pro 15 を設置した。iPhone Pro は使い始めたばかりでどの程度の画質がどれくらいの時間録れるかに不安があったためにテストとして使用した。テーブル上には、ズームの H2n という 4 チャンネル録音の IC レコーダとオリンパスの DS-800 という 2 チャンネル録音の IC レコーダを置いた²⁾。ほかに、3 人の卒業年の大学の卒業アルバムとお茶のペットボトルと紙コップ、お菓子もテーブル上に置いた。卒業年の前後のアルバムもわきの椅子の上に置いて参照できるように準備した。

2) 機器の設定を記す：XA25 は MP4 モードで 35Mbps、59.94P；ソニーの 2 台は XAVC-S モードで、8.3Mbps、60P である。iPhone Pro 15 は 4K で 30P である。H2n は、録音モードを 4 チャンネルサラウンドモードにし、WAV44.1kHz/16bit で「自動録音」とした。DS-800 は PCM 録音の 44.1kHz/16bit、センターマイクは「オン」にし、録音感度は「高」、録音レベルは「オート」とした。

セッション冒頭で「おねがい」文書をもとに南から口頭で趣旨を説明した。卒業アルバムを見ながら思いついたことを自由に「おしゃべり」してもらいたい、話してはいけないことはないといったお願いをした。セッションとして「1時間半」ぐらいにしたいという希望が表明された。南は退室後ほぼ1時間半で戻り、その後本論6節で取り上げるようなインタビューとなった。インタビューの最後にデータ使用の承諾書（付録4）にサインしてもらった。記録された映像の時間は2時間14分ほどとなった。

収録データは外付けのSSDにまとめて保存した。録音をNottaという自動文字起こしサービスを利用して文字化した。インタビューのうち6節で取り上げる部分は、学生アルバイトに詳細な文字起こしをしてもらった。おしゃべりセッションにおける「変わった」に関わる部分は、南がCasual Transcriberというアプリケーションを利用して文字起こしし、本論で使用している断片のトランスクリプトを作成した。トランスクリプト記号はJefferson（2004）とMondada（2016）、および串田ほか（2017）を参照している。凡例は付録1として論文末に掲載している。

3節から5節は、マルチモーダル相互行為分析をおこなった（Mondada 2018; Mondada et al. 2021; Minami et al. 2023; Due et al. 2024）。断片の詳細トランスクリプトを提示して分析と記述をすすめる。6節では、語られている内容に照準した分析と考察をおこなう。その断片トランスクリプトは論文末に付録2として掲載している。

3 「知ってるひとをさがせ」：セッションの意味づけ

調査者が「思い出おしゃべり」と呼んだセッション場面であるが、調査協力者がどのようにとらえたのか。その意味づけがどのようなものかは、別に考えるべきである。セッションのはじめのほうでセッションの意味づけをめぐるやりとりが見られた。最初にこれを取り上げる。

3人はZ大学系列の中学校からの同級生である。AとBは中学校から、Cは小学校から通っている。大学卒業後20年あまり経過しており、40代なかばである。大学の卒業アルバムを見ながら「思い出おしゃべり」をすることをお願いしたが、冒頭部分での3人にとってのひとつの関心は、このアルバムを持っていないと思われること、そして自分が個人写真撮影をしたかどうかということであった。

この卒業アルバムの構成を簡単に述べると、最初にキャンパス全景などの写真がある。そして教職員の写真が続く。つぎに学部と学科ごとに卒業生の個人写真があり、ゼミナール集合写真、部活動とサークルの集合写真、行事のスナップ写真と続く。この3人は、断片5の部分のまえのところで、すでに一度全景写真から教職員写真のあたりを見ていた。このとき、自分が個人写真撮影をしたかどうかということを経験していた。そして、断片5のやりとりが生じるがそれは5節で取り上げる。

個人写真のページを見始めてすこしして断片1のやりとりがあった。断片中のアルファベットは人名を示す。丸い記号は中学校時代のクラス名、三角の記号は部活動名を示す。記号ひとつは1モーラに対応している。丸い記号、あるいは三角の記号のちがいは別のものを示している。だが、断片をこえて同じものを指すわけではない。+、*、%の記号はA、B、Cそれぞれの身体的行為（embodied action, Mondada 2016）の発話との位置関係を示している。

3-1 写真人物の認識と容貌の比較照合

個人写真のページを見始めてすこしして断片1のやりとりがあった。「知ってるひとさがし？」という定式化を含むものである。この定式化について3-2で取り上げる。まず、写真人物の同定と認識の主張について論じる。

断片1-1 iPhone [00:18:02.541] ; XY [00:19:28.419]

001 A : [あ DDDD +さん.

002 B : [あ D * DDD さん. *

a +右手で写真をさす

b *左手で写真をさす

*左手を引き戻す

003 A : う .hh >さんとかいっちゃった. <

004 (0.5)

005 A : >こんなかおだったっけ+ねえ<

a +正面のCに両手でアルバムのページを少し持ち上げて見せるようにしながら視線を向ける

006 C : °わからな [い°

007 A : [○○○? (.) [+◎◎?

008 B : [>たぶん<*こういうかんじ=

a +右のBに視線を向ける

b *左手で再び写真を指す

009 A : =ねえ=

010 B : =*ん=

b *左手を引き戻す

011 A : =>+>こんなかんじだよね:<=

a +右手で写真の上をなぞりながら右へ動かす

写真を見ていてよくおこなわれるのが写っているものの同定と認識の主張である。個人写真の場合、

そのひとの名前を言うことで同定するとともに認識したことを主張するのが普通である。そして、001行と002行に見られるように「あ」という知識状態の変化標識（Heritage 1984; 串田ほか 2017: 102）と指さしを伴うことが多い。AとBが同時に同じ写真の人物を同定して認識を主張していることは、まさにこれが典型的なものであることを示している。

人物の同定と認識の主張に引き続いてよくおこなわれるのが、写真の容貌との比較照合である。比較照合の対象となるのが、そのひとの容貌として保持している「記憶画像」のようなものであろう。Aが005行で「こんなかおだったっけねえ」と発話しておこなっているのは、A自身がD（「DDDD」）について保持している記憶画像と写真とが合致しないことの表明である。この質問を宛てられたCは「わからない」と小声で応答する（006行）。Aは005行の自身の問いかけへの回答を待たずにつぎの質問を繰り出す。007行では中学校時代の2つのクラス名が言われる。この中学校で生徒は3年間同じクラスだった。Dの在籍していたクラス名をたずねるものだ。この質問は、Goffmanがアイデンティティペグと呼んだものに追加情報を付加するかたちとなっている（Goffman 1963; 南 1998）。この質問にはAが比較対象としているのがDの中学校時代の容貌であることがうかがわれる。007行の後半にオーバーラップしてBが「>たぶん<こういうかんじ」（008行）と005行のAの質問への回答を提供する³⁾。中学校時代の容貌（記憶画像）と写真はほぼ同じであるとの判断を述べている。

断片1-2

- 012 B: =ん: ◎◎じゃ*ないの=
b *左手で写真を指してすぐに引き戻す
- 013 A: =◎◎か。+ま: なんか、たのしいね。そのなんか,
a +左手で別のところを触りながら前かがみとなる
- 014 (1.0)
- 015 B: 知ってるひとさが [し?]
- 016 A: [ぜったい] +これちゃらい [よ]
- 017 C: [%でもいま] [けっこう]
c %上体を起こしながら
a +左手で写真を指す

3) ひとつ留意すべきは、アルバムの向きと3人の位置関係である。アルバムを正面から見る位置に着席しているのがBであり、AとCは横から写真とその氏名を見る位置にいる。

- 018 C: EEE [ちゃんなんて
019 A: [heheha
- 020 C: %このままの記憶でわたしの [こっちゃってる [から:
021 A: [あるあるある:
022 B: [*ん:::
 c %左手で E の写真を指しながら
 b * E の写真を右手で指す
- 023 C: [いま (.) いま (.) どうなのかが] わかんない [い
024 A: [いい (.) いいやつだったよね:.]
025 B: [>だって*これ
 b *右手で写真を指す
- 026 B: 中学校のかおと*変わんないんじゃない [ないの
027 C: [そうだね:
028 A: [変わんない
 b *右手を引き戻す
- 029 B: ふ:ん.
- 030 (1.5)
- 031 C: %あ, FFF くん.
 c %左手で写真を指す

記憶画像の話題は C によって引き継がれる。C は、この断片 1 の直前のところで認識した「EEE ちゃん」(E) に言及し (018 行)、その記憶画像が写真にある「このままの記憶でわたしのこっちゃってる」と言う。この点は B の「だってこれ中学校のかおと変わんないんじゃないの」(025-026 行) によってさらに展開される。写真の容貌と「中学校のかお」が「変わんない」としている。この発話は A と C の同意を求める組み立てとなっており、2 人は B の発話が終わるまえに同意を表明する (027 行と 028 行)。3 人はこの人物についての記憶画像を持っており、それは中学校のときのものであることが明示されている。

一方 C は、3 つめの要素に言及する。018 行に続けて「いま (.) いま (.) どうなのかがわかんない」(020 行) と発話する。つまり、E について C が保持している記憶画像はこのアルバム写真のものと同

じであるが、いまのEの容貌は「わかんない」のである。つまり、中学校時代の記憶画像、大学卒業アルバムの写真、そして卒業後20年ほどが経過した「いま」の容貌が問題となりうるということだ。そして、写真との異同が問題となり「変わった」と「変わらない」と言うことができるのは、記憶画像と「いま」の容貌ということになる⁴⁾。

この断片でもうひとつ注目したいのは、013行と015行である。Aが「ま：なんか、たのしいね。そのなんか、」と現在従事している活動について「たのしい」と感想を述べる(015行)。013行は「なんか」が2回使われている。Bは、「たのしい」と感じる対象を特定するためにその候補として「知ってるひとさがし？」との定式化を提示して確認を求める。定式化(formulation)とは、その場で行われていることを言語で表現することである(Garfinkel & Sacks 1970)。しかし、Aからの確認はない。すでにAは別の写真を見ており、その写真の人物について「ぜったいこれちゃらいよ」(016行)と発話する。容貌からそのひとの人物についての推察をおこなうものであり、人物写真を見るときにわりとよくおこなわれるタイプの推論である。「知ってるひとさがし？」という定式化の是非は宙ぶらりんとなり、次項で取り上げる部分で再度持ち出されることになる。

3-2 「知ってるひとをさがせ」

断片1でBが「知ってるひとさがし？」と定式化して確認を求めたが、これにAやCが応じることはなかった。Bが再度「知ってるひとをさがせ」と発話して今度はAとCが確認をあたえることになった。断片2である。断片1の終わりから1分30秒経過した部分である。

断片2-1 iPhone [00:19:52.513] ; XY [00:21:28.332]

- 001 C: あ。
- 002 % (0.3)
c %右手でFの写真を指す
- 003 C: [FFFFってあの△△△ [△△△でわたし
004 A: [(いつ) [だれ::?
- 005 A: あ↑::: [>はいはいはい<あ、+ GG ちゃんだ。
006 C: [あの:
007 B: [ふ:::ん

4) 実はもうひとつの要素がありうる。写真撮影した当時の実際の容貌である。つまり、「写真写り」が良い、あるいは良くないといったことである。この3人のセッションでは1回だけこの点が話題となった。Cの個人写真について写りが良くないといった発話をC自身がおこなった。ほかのグループでは当事者ではなく他者についてのやりとりが見られた。たとえば、「実物以上」の写真だといった発話である。

- a + 右手で写真を指す
- 008 (0.7)
- 009 C: あ↑::.
- 010 + (3.8)
- a + F と G の 1 行下の写真を指して見る
- 011 A: + FFFF わかる. >ちっちゃい子だよね<=
- a + F の写真を右手で指しながら
- 012 C: =そう

断片 2-1 では、C が 001 行で「あ」と知識状態の変化標識で F の認識を主張したあと、その写真を指して (002 行) 認識の誘いをおこなう (003 行)。「FFFF」という愛称とともに、F が在籍していた部活動名 (「△△△△△△」) を挙げている。A は「あ↑::.>はいはいはい<」と認識したことを主張するが、「GG ちゃんだ」と F のとなりの人物 (G) を同定し認識を主張する (003 行)。大学の卒業アルバムのように 1 ページに多くの個人写真が掲載されているものを見ているときによく生じることである。C は指された G の写真を見て (006 行)、007 行で「あ↑::.>はいはいはい<」と認識を主張する。

一方の A は、F と G の写真の 1 行下の写真を見てから (010 行)、011 行の「FFFF わかる。ちっちゃい子だよね」と発話する。クレイムとデモンストレーションという対比 (Sacks 1992; Minami et al. 2023) をするならば、まさに「わかる」がクレイムであり、「ちっちゃい子」という特徴づけを提供することで知っていることのデモンストレーションをしている。そして「だよね」と確認の求めをおこなっている。

断片 2-2

- 013 (2.2)
- 014 B: 知ってるひとをさがせ: [↑:
- 015 C: [>そうなのそうなの<=
- 016 A: =そう. >おもしろいおもしろ [:い<
- 017 B: [え: ? どこだろうね:
- 018 (1.0)

- 019 B: *わりとこないね。
b *右手でアルバムの下端を指しながら

014行のBの「知ってるひとをさがせ：↑：」⁵⁾は、連鎖を開始する位置で発話されている。断片1の015行（「知ってるひとさがし？」）と同じく、自分たちが現在おこなっていることを定式化して同意を求めるものと聞くことができる。これにはCがまず「>そうなのそうなの<」（005行）と応答し同意する。続いてAが「そう。>おもしろいおもしろ：：いく」（006行）と同意したうえで、「おもしろい」という査定を繰り返し提示する⁶⁾。断片1の013行の「たのしい」と同じ肯定的なものである。

こうして、ここでの活動の定式化についての合意が3人によって明示的になされる。そのうえ、「おもしろい」という肯定的な査定も否定されることはない。調査者が「思い出おしゃべり」と名付けたものを、当事者が「知ってるひとさがし」とする意味づけの共有が相互行為的に達成されるやりとりとなっている。

4 容貌の変化

アルバム写真を見るときに最初によくおこなわれるのが、保持している記憶画像と照合して写真の人物を同定し認識を主張することだと3節で論じた。つづいてなされたことのひとつが、写真と記憶されている容貌とを照らし合わせて「変わらない」と査定し主張することである。写真と比較対象されるものとしては中学校時代の記憶画像と「いま」の容貌とがある。中学校からの同級生である3人にとっては、比較対象が明示されないときには、それは中学校時代の記憶画像であると想定されているようだ。

このセッションでは「変わった」という発話ではなく、容貌の変化がない、「変わらない」という発話が多く見られた。多くの場合は、同定や認識主張の連鎖の拡張として置かれていた。4-1ではその事例を取り上げる。他方、物語のオチとして「変わらない」と発話される事例もあった。こちらを4-2で論じる。

4-1 「あんま変わんないね」

断片3では、認識の主張に続いて「変わんない」という査定が見られた。CによるHの認識主張（001行）から断片3-1は始まる。

5) 『ウォーリーをさがせ』という絵本があった（Handford 1987=1987）。ウォーリーという人物を、ページ一面ぎっしりと描きこまれた絵の中からさがしだすことを楽しむ絵本である。その初版本の日本語訳発売が1987年である。1970年代後半生まれの3人が小学校高学年あたりのころである。社会的に流行となり、3人のあいだでかつて話題となったことがあるのかもしれない。

6) 「査定」は「assessment」（Pomerantz 1984）の訳語である。「評価」あるいは「評定」とされることも多いが、本論では「査定」としている。

断片3-1 iPhone [00:21:55.039] ; XY [00:23:20.512]

001 C: あっ%あっ. (0.4) あの:%
c %左手で写真を指す %左手を引き戻す

002 A: + HHHH
a +写真を右手で指しながら

003 (0.3)

004 B: [ん::::ん.

005 C: [JJ. JJ.

006 A: えっ?+
a +右手を口元に持っていく

007 C: ○○ぐみだった

008 A: ん::::ん. いや+こ:やって [なんか見ると

断片3-1の冒頭では、ある個人の同定と認識が相互行為的に達成されている。Cは認識表明後の間(0.4秒)のあとに「あの:」と言いだす(001行)。名前がすぐに出てこないようである。Aは写真下にある姓名のうちの姓(「HHHH」)を読み上げる(002行)ものの認識を示すことはない。Bが認識を主張する(004行)のにオーバーラップしてCは「JJ. JJ.」とHの愛称を繰り返す(005行)⁷⁾。Aはそれでも認識を示さない(006行)。「えっ?」と聞き返すのは修復の開始である(Schegloff et al. 1977=2010)。Aは右手を口元に持っていくが、「思い出す」ことをしているように見える。Cは「○○ぐみだった」とHの中学校時代のクラス名を挙げて認識のための追加情報を提供する(007行)。Aはこれを聞いて008行の冒頭で認識を主張する。

断片3-2

008 A: ん::::ん. いや+こ:やって [なんか見ると

009 C: [ひさしぶりだ.
a +右手をアルバム上に

7) 人名を表すのにここまでアルファベットを順番に使ってきた。つぎは「I」の順番であるが、活字としてわかりにくいのでとばして「J」としている。

010 A: ほんと、も h [hh @おひさしぶり@って

011 B: [ん:::::

012 A: かんじなるね:

008行の後半からのAの発話(008, 010, 012行)は、自分がHの認識に手間取ったことの原因説明として聞くことができるものだ。「おひさしぶりってかんじなるね:」と言うのである。長期間顔を見ていないことの主張である。「ひさしぶり」という表現は、Cの009行の「ひさしぶりだ」を利用して、「おひさしぶり」は、久しぶりに会った者同士の挨拶ことばである。「も hhh おひさしぶりって」は呼気を含んだものであり、アニメーションとして聞こえる(Goffman 1974, Arminen 1996)。つまり実際に会ったときの挨拶ことばの再演である(南 2008)。「って」という引用標識も用いられている。

断片3-3

013 B: も:*この時点で:[*お:ちょっ [と>知ってるかおとちがうよくって

014 C: [%んん

015 A: [おおって(ちがう)

b *左手でアルバムを数回指す

*左手を持ち上げて力を入れる

c %上体を起こして左のBを見る

016 B: >おもうときも¥ある [もんね¥< huhu

017 C: [そ:だよな.

018 A: [あ:+ KKKK くんじゃん.

a +写真を右手で指す

019 (0.7)

020 A: この子>あんま<変わらないね.

021 B: ふ::::ん:

022 A: ふ:::ん. >いきますつぎ<

023 B: [はい.

024 C: [はい.

続く 013 行からの B の発話も認識困難な事情にまつわるものと聞けることができる。「お：ちょっと＞知ってるかおとちがうよっておもうときもあるやもんねや＜ huhu」と、笑いも含んだ発話となっている。「知ってるかお」と写真の顔がちがうひともいると言っている。「おもうときもある」という表現は一般論であり、A が認識できなかった H について言っているようには聞こえない。それでも A を擁護するものと聞けることができ、これに C も「そ：だよな。」と同意している。「知ってるかお」が中学校時代のものであると想定されることを再度注意しておきたい。

しかし当の A はつぎの知人 (K) を見つけて認識の主張をおこなう (018 行)。短い間 (0.7 秒) のあと、「この子＞あんまかわんないね」と続ける (020 行)。これらは独り言のようにやや小声で発話されている。018 行はほかの 2 人の発話とオーバーラップしている。これに応答がなく、020 行は続けて発話される。これに B は「ふ：：：ん：」と応じているが (021 行)、ただ受け取りを出しているようだ。同意あるいは不同意をする材料を持っていないかのようなのである。つまり、K (「KKKK くん」) をよく知らないということであろう。C は応答することもしていない。これにたいして 022 行の A の「ふ：：：ん。」はなんらかの納得を表示しているかのように聞こえる。なににたいする納得かははっきりしない。卒業アルバム写真を見るということはこのようなことなのだという納得を示しているという記述が可能かもしれない。「いきますつぎ」と次のページへとページをめくるまえのある種の「締め」という位置で発せられているものである。

020 行の「かわんないね」が「ね」で終わっているのにも関わらず、同意が追求されていないということ、そしてシンプルな認識主張の発話の直後に置かれていることは、このセッションでは繰り返し観察された。これは、写真の人物同定や認識の主張がトラブルなくおこなわれたことの帰結であると考えることができる。「かわらない」からこそ、写真がだれであるかがわかるという理由説明の一部と考えることができる。

最後に B の 013 行に戻りたい。「も：この時点で：」という発話では、B は左手でアルバムを 3 回上下させて指すように動かしている。「この時点」とは写真が撮影された時点、つまり大学 4 年生の「時点」のことである。それが、中学校時代と想定される「知ってるかおとちがう」と言う。自分たちの比較基準をはっきりと自覚していることがここに示されている。

もうひとつ指摘しておきたいのは、A が「＞いきますつぎ＜」(022 行) と発話して、ページをめくることへの理解を求めていることだ。このように複数人で冊子体のものを閲覧するときには、ページめくり担当という分担が生まれることが多い。この場面では、明示的な交渉が行われることなく A がページをめくる担当となっている。

4-2 「かわらない」

前項で取り上げた A の「あんまかわんないね」は、「ね」がついたものである。聞き手の同意を期待し求めるものである (Morita 2002; 森田 2005)。これとは対照的に本項では、そのような期待を伴わない「かわらない」を取り上げる。

断片4 iPhone [00:23:08.517] ; XY [00:24:34.230]

001 C : あ% LLL.

c %右手で写真を指す

002 (0.3)

003 A : あ, MMMM + [くん%だ. [+ん : ?

004 B : [あ* LLL : [: :

005 C : [あ, か

a +右手で写真を小さく指す

+ C の指す写真を見る

b *正面のLから左のMに視線を移す

c % A の指す写真を見る

006 C : あ : % MM [MM くん

007 A : [LLL =

c % A の指す写真を右手で指す

008 C : =% LLL =

c %手元のLの写真を指す

009 A : = °MMMM くん °. +ほんとだ [LLL だ :

010 C : [%せん

a + C の指す写真を見て

c %右手で繰り返し指しつつ A を見る

011 C : >じゅうにがつの : [なかばに

012 A : [+ん : ん.

a +上体を起こす

013 C : (.) %会った. <

c %左のBを向いて

014 (.)

- 015 C: [> 小学校 [のクラス会があつて [%行ってきた< =
 016 B: [*あ ()
 017 A: [あ, ほんと: [え
 b *上体を起こしてCを見る
 c %右手で2回写真を指す
- 018 C: = [<%変わらない. > [hehe
 019 B: [(へ:::)
 020 A: [+たのしそ:だね.
 c %3回小刻みに指す
 a +お茶カップを左手でつかむ
- 021 A: [いまだに会うんだね. +
 022 C: [あとで写真%見せます.
 c %右手をすこし上げる
 a +お茶を飲む
- 023 B: ん: ↑: ↓: ん.

断片4の冒頭、2人の写真が話題となる。LとMである。CがまずLの写真を指しながら「LLL」と発話する(001行)。同定するとともに認識したことを主張している。Aはそれに応じることなく、手前の写真を指して「あ、MMMMくん」とMの認識を主張する(003行)。そのあと「ん: ?」とCの指す写真に視線を向けるが、これはBの「LLL」(004行)という認識の主張に応じるもののようである。

一方Cは、AによるMの認識の主張(003行)に応じて、Aが指すMの写真を見て(005行)、「あ: MMMMくん」とMの認識を主張する(006行)。Aは006行の開始にやや遅れて007行で「LLL」とLの認識を主張する。これを受けて、Cは006行でMの写真を指していた右手を急いでLの写真へと戻す(008行)。このとき再度「LLL」と発話するが、これはAによるLの認識を確認するものと聞けることができる。

009行冒頭のAによる「MMMMくん」も同じく、CによるMの認識主張(006行)の確認と聞けることができる。そして、続く「ほんとだ」でLを認識したことのCによる確認(008行)を受けて、Aは自分でもLの認識を再確認している(009行)。そこで、CはLにまつわる物語を始めている(「せん」010行)。これは、「先月」と言いかけて、「じゅうにがつ」(011行)と自己修復しているものと聞こえる。この流れでAの009行の「LLL:」はオーバーラップされている。

Cの物語は、12月中旬に「小学校のクラス会」があり参加して、そのときにLに会ったというもの

だ (011, 013, 015 行)。このことは、聞き手である B と C によって受けとめられる (016-017 行)。3 人の発話がオーバーラップしており B の発話内容はあまり聞き取れないが、良いことがあったニュースとして聞いていることを示しているようだ。A の「あ、ほんと：」は知識状態の変化標識 (Heritage 1984; 串田ほか 2017: 102) である「あ」にくわえてさらに「ほんと：」が続き、ニュース受けとめとして特徴的なものである。

C の 018 行の「変わらない」は物語のオチと聞かれるように、強勢をおいてゆっくりと発話されている。そのあとに笑いが続くことも特徴的である。そして、「あとで写真見せます」(022 行) と続ける。L のいまの容貌が「変わらない」ことをクラス会の写真で確認してもらうというのである。

A の応答は「変わらない」という発話ではなくて、小学校のクラス会が開かれたということに向けられる (「たのしそ：だね。いまだに会うんだね。」020-021 行)。C は、Z 大学の系列校に小学校から通っている。A と B は中学校からである。A の発話は、小学校のクラス会が開かれていることを話題とするに値するものとしている。もうひとりの聞き手である B は、特徴的な抑揚のある「ん：↑：↓：ん」で受けとめている (023 行)。C の物語と A の受けとめをまとめて了解し、良い話だったことをマークしているものと聞くことができる。

C の「変わらない」が主張しているのは、現時点の L の容貌が卒業アルバムの写真、あるいは 3 人がよく知っている中学校時代と「変わらない」ということである。その発話のしかたから、ユニークな愛されるべき人柄でありそれが「変わらない」という含意がある可能性もある。

以上、本節では個人写真の人物を同定し認識を主張する連鎖と「変わらない」という査定の事例を検討した。本研究の基本的問題意識である「人生における変化にかかわるトーク」の事例として、写真を見て「変わらない」という発話が多くおこなわれていることが明らかとなった。中学校時代と卒業アルバム写真の時点で容貌が変わっていないという発話が数多く見られた。写真の人物の認識主張がなされたあとに、認識が可能となった理由として聞くことができるように配置されているものが多かった。他方、物語のオチとして配置される事例も観察された。

5 考え方の変化

容貌が変わらないという発話が多く見られた一方、本論冒頭で紹介したようななんらかの「内面」の変化が話題となることは少なく、このセッションでは 1 回だけ見られた。本節ではその事例を検討する。

断片 5 はセッション開始後すぐの部分である。A がペットボトルのお茶を紙コップに注いで B と C に渡している。まだアルバムは開かれていない (正確に言うと、一度開いて見始めるということが始まったが、お茶を注ぐという活動が始まったところで閉じられている)。上述したように、大学の卒業アルバムについての記憶が 3 人にはほとんどない。買ったかどうか、自分が個人写真を撮影したかどうかを覚えていない。B だけは購入したことを覚えていたが、それをデジタル化して紙のアルバムなどは処分したということであった。断片 5 は、A が小学校時代の文集などを実家から持ち帰ったという話の続きから始まる。

断片5 iPhone [00:02:51.570] ; XY [00:04:16.005]

001 A : >いやそれくどうしようかなと思って, +は-箱ごともってかえてきたの:=
a +両手で四角の箱の形を空中でつくる

002 C : =ん=

003 A : =もう小学校の卒アルもあってさ:

004 C : [°まあね:°

005 A : [>もうなんかく+はずかしいわけ. いまさら,
a +左手で自分の胸を指す

006 A : 小学校 [のとき書いてあることとかさ:

007 B : [はずかしい:

008 C : .zzz

009 A : なんかてれちゃうよね.

010 B : てれちゃうよ. [%はずかしい:

011 A : [え:こんなこと書いてたんだと[思って.

012 C : [%いやでももう,
c %左のBをちらと見る

b *右手を胸にあてる

013 B : [*せけんしらずの

b *右のCを見る

014 C : [%おばさんになったら%はずかしいもなにも[ない%よね.

c %左のBを見る %正面のAを見る %左のBを見る

015 B : [あ>たしかにたしかにく

016 A : [hahahaha

017 C : [その

- 018 B : *たし [かに:ちょっと*わかる:
b *ゆっくりと左の A を向く
*右の C を向く
- 019 C : [もうちょっと%若いとちょっと気にするけれど: [もういまは [もうね:
c %右手を目のまえで小さく上下に動かす
- 020 B : [ん::
- 021 A : [ahaha
- 022 B : *ちょっといまね:はずかし [さを脱してる時期に
b *左の A を見る
- 023 A : [+え:?
a +右の B を向く
- 024 B : [はいってる
- 025 C : [そ:
- 026 A : [>なんかいやじゃんむかしの自分のやつ書いたの読むっていやじゃない?<=
- 027 C : =え?>もうもう [もうね. もう] [もう<
- 028 A : [>あ平気?<] [あ
- 029 C : もう [おわ-
- 030 A : [¥あ, もう¥hahahaha
- 031 B : [>*それはそれ?<=
b *右の C を向いて右手で指す
- 032 C : =そう. [そうそうそう
- 033 B : [それは*それ?
- 034 A : [あ¥そう¥hahaha
b *左の A を見る
- 035 B : [(なんか)
- 036 A : [haha そうか:
- 037 B : [> (こ) んなときもあつたのよみたいなく
- 038 C : [時代は変わったってかんじ=

- 039 A : =あ：まあね：[なつかしんでね：
 040 C : [も：も：%自分ってかんじじゃないかな.
 c %左手で自分の胸を指す
- 041 C : もう [%べつもの？
 c %両手を卓上に置くように動かす
- 042 B : [あ：べつ [じん [かく
 043 A : [あ:::
 044 C : [は：
- 045 A : あ：そういうことね：[:
 046 C : [ん：
- 047 A : まそうね：[::>なんかあたし（ ）+
 a +両手でアルバムをさわる
- 048 C : [>ちょっと<%みましょ：[みましょ：
 c %両手でアルバムをさわる
- 049 B : [¥みましょ：みま*しょ：¥
 b *右手でアルバムにさわる
- 050 A : ちょっとあたし買わなかったから [たのしみだわ
 051 B : [なに？
- 052 B : %△△△△部をさがす？=
 c %両手でアルバムのページをめくる
- 053 C : =いや [なんか (さい)
 054 A : [なんか, ちょっといっこずついこうよ
- 055 C : あ [の：なんか風景とか] もあった.
 056 B : [>いっこずついくの？<]

Aの実家ではAの持ち物を整理することになった。箱に入ったAの学校時代の卒業アルバムや文集などを過日持ち帰ったと言うところが断片5の001行である。断片5で話題となっていることを、「昔

の自分との直面」とここでは呼ぶことにする。これを、「いや」だとするAと、気にしないというC、そして両者への理解を示すBというのが大きな構図である。

Aは、「小学校のとき書いてあること」(006行)を読むと、「え：こんなこと書いてたんだと思」う(011行)。「はずかしい」(005行)、「てれちゃう」(009行)と言う。「なんかいやじゃん」とも表現する(026行)。

対してCは、Aに同意しない。「いやでももう、おばさんになったらはずかしいもなにもないよね」(012, 014行)と不同意を示す。ただ、Aにまったく同意しないわけではない。「もうちょっと若いとちょっと気にするけれど：もういまはもうね：」(019行)として、「若い」ときと「いま」を対比する。「おばさんになった」「いま」は「気」にならないと主張している。「若いとちょっと気にする」というのは、Aの今の心情とほぼ同じである。

ここには、「内面」と呼ぶうるものが変化したことが主張されている。若いときの自分が表現されている文章を読むこと(「昔の自分との直面」)への感じ方である。Cはその変化を、「時代は変わった」(038行)、「自分ってかんじじゃない」(040行)「べつもの」(041行)と表現している。文章を書いたかつての自己を、現在の自己と切り離して眺めるようになっていいるとの主張と聞くことができる。

AとCが対立する考え方を提示するなかで、Bは両者を調整するような発話をしている。冒頭部のAの発話にたいして「はずかしい：」(007行)、「てれちゃうよ」(010行)とAの表現を繰り返してAへの同意を示す。しかし、CがAへの不同意を表明すると(012, 014行)、「あ>たしかにたしかに<」(015行)、「たしかに：ちょっとわかる：」(018行)とCの立場への理解と同意を表明する。「ちょっといまね：はずかしさを脱してる時期に」(022行)「はいってる」(024行)という発話はCの立場を言い換えるものと聞こえる。変化していることを明言するものである。

AとCの対立を解消する契機となっているのがBによる「それはそれ」という表現である(031行)。Cの立場への同意をなかなか示さなかったAも、「あ¥そう¥hahaha」(034行)と不同意的ではない受けとめを示す。笑いは対立のもたらし緊張の低減を表示するものと聞くことができる。さらに「>(こ)んなときもあったのよみたいなく」とBはCの立場に別の表現をあたえる(037行)とAは、「あ：まあね：」と受けとめる(039行)。「あ：」は、034行の「あ」よりも納得の度合いが強いものと聞くことができる(Endo 2018)。「なつかしんでね」と続けて、A自身なりの解釈を付け加えている。さらに、「べつもの」(041行)と「べつじんかく」(042行)という表現がCとBから出されたのにたいして、「あ：そういうことね：」と理解をしめして(045行)、「まそうね：」(047行)と同意している。これを受けて、Cは「見ましょ：見ましょ：」とアルバムを見るというこの場面の主要活動に取り組むことを提案している(048行)。

つまり、若いときの自分と向き合うのがいやだとして避けていた状態からの変化が話題となっている。この状態を「おばさん」になったいまも保持しているAにたいして、Cは異論を唱えている。自分はそうではないと主張している。ここには「内面」の変化が示されている。ただ、「変わった」ことを明示的に主張しているわけではない。Aとの差異を主張することで、かつての考えとの変化を暗示的に主張するものとなっている。「人生における変化にかかわるトーク」とは言えるものの、「人生の転

機」が主題的に語られているものとは言えない⁸⁾。

6 インタビューから

本節では、セッション終了後に行われた著者とのインタビューを取り扱う。変化の語りがほとんど出なかったこと、そして、学生時代のふりかえりを求める問いかけへの回答を取り上げる。なお、本節ではトークの内容に照準して議論を進める。5節まででおこなったマルチモーダル相互行為分析はトークの組織の分析にたいして強力で効果的なものであるが、本節では連鎖組織の詳細に言及することはしない。断片は論文末の付録（断片付1）とした。

6-1 変化の語り

セッション終了後著者とのインタビューがはじまってすこしたった部分である断片付1では、調査協力者の3人がどれくらいの頻度で会っていたかを確認した。わりと頻繁に会っており、このセッションの8か月まえにも3人は会っている。3人が会ったときの話題としては家族や仕事のことが多いということも語られた。

この回答を受けて、著者は「人生の転機」あるいは「転換点」がセッションにおいて話題となったかとたずねた。その回答は、ならなかったというものであった。その理由として考えられるのは、3人がたがいの動向をよく知っていることだ（C「みんなそれなりに知ってたからじゃない」020行）。就職や結婚、出産などの大きなライフイベントについては、3人はそのときどきに互いに知らせあっていた。

それでは、長期間会っていないときに人生の転機を語るかと想像してみても、そうはならないと言う。そんな話をする場面として考えられるのは、年の離れた職場の後輩に相談されたときである。悩んで相談してきた後輩にたいして、「わたしもこういうことがあったから：がんばりなさいとか」と励ますようなときに、「例示として」自分の話をする（080-081, 083行）。そして、「人生の転機」の具体的内容としては「結婚」があがった（089行）。

他方、インタビューのようなかたちで「質問されたら」自分の人生の転機について語ることはできるとの発言はあった（C, 068-069行）。これにはAも同意する（107, 109行）。つまり、協力者の3人のあいだで、人生の転機を思い出おしゃべりセッションのような状況で語ることは考えがたいということである。問われると答えることはできるが、頻繁に連絡をとりあっている友人にたいしてそれを主張する必要はないし、しないということであった。他方、あらためてたずねられたときには、人生の転機について語ることはあるし、できるということである。

8) 断片5の052行目の「△△△部をさがす？」というBの発話は、AとCが所属していた部活動の写真を探すことを提案する問いかけである。だが、アルバムを最初から1ページずつ見ることになる（A「なんか、ちょっといっこずついこうよ」054行）。「さがす」ということばがここで最初に使われているが、「知ってるひとをさがせ」につながっているようには思われない。

6-2 学生時代のふりかえり

インタビュー内容に照準した結果としてもうひとつ論じたい。学生時代の評価である。「大学時代をふりかえってみてどうですか」という調査者の質問は漠然としている(112-113行)。これに対する回答は、Z大学との関わりが薄かったというものであった。「青春してこなかった」(A, 114行)という表現もなされたが、「学校にかかわればよかった」(B, 117行)、あるいは「たのしめばよかった」(A, 118行)と言い換えられる。「文化祭」に参加しなかったということがその一例だが、根底には大学で新しい人間関係を積極的に作らなかったということがある。繰り返しになるが、この3人はZ大学の系列中学校の同級生である。大学時代もその交友関係を中心に生活していたという思いが強く共有されていた。

学業面についての問いかけには、意欲的にいろんな授業を履修すればよかったとの回答があった。著者から見るとこの3人は平均的な学生に比べて、多くの授業に積極的に取り組んでいたようであった。そのような学生時代をすごした者であっても、卒業後20数年たってふりかえると、もっとやれた、やっておくべきだったという思いが中心となるということである。

7 「思い出おしゃべり」セッションにおける変化のトーク

大学の卒業アルバムをいっしょに見るという場面においては、容貌が「変わらない」という発話が多く見られた。まず共通の知人を同定し認識するやりとりがあり、そのあとの位置で容貌が「変わらない」ことが確認されていた。認識できたことの原因としても聞くことができるものであった。

アルバムの写真と比較し照合されるものとしては、中学校時代の容貌、大学卒業後20年ほど経過した「いま」の容貌、そして大学時代の容貌とが想定されていた。調査協力者は、同定と認識にあたって、中学校時代の在籍クラス名を手がかりとしていた。中学校時代の記憶画像が主たる比較対象とされているようであった。写真の人物に最近会ったというエピソードが「変わらない」という発話で締めくくられることもあった。「いま」の容貌との異同を語るものであった。「写真写り」と言われる、「実物」と写真の異同に関わるやりとりはほかのセッションにおいてはわりとよく観察されたものの、このセッションにおいてはわずかにCの個人写真について話題となったのみであった。

同定と認識のあとの位置では、写真の人物について容貌以外の特徴づけも見られた。「いいやつだったよね」といった発話はその例である。ほかには、当該人物とのエピソードが語られることが多かった。「思い出」の主要な構成要素をなすものである。

容貌の異同の発話が多く見られた一方、「内面」に関するものは1例のみであった。それも「変わる」ということばは使われずに、対立する考え方が対置されるものであった。「昔の自分との直面」がいやだ、はずかしいという考えと、そういう境地からは脱したとするものである。変化前と変化後が対比されているが、その変化が「変わった」ということばで表現されることはなかった。

「変わった」発話が見られなかったことについてインタビューでは、この3人が頻繁に連絡を取り合い会っていることがその理由として述べられた。ただし、しばらく連絡を取っていなかったとしても、友人同士で「わたしは変わった」と発話するようなことは想像しがたいということだった。考えられる

状況として、職場の後輩から相談を受けたときに、自身のライフヒストリーを語って励ますなかで変化を話すということが挙がった。「おしゃべり」のような状況では「変わった」発話はあまりなされないということだ。

ここまで論じなかったが、異同が語られる人物が自己か他者かという区分がある。写真との容貌の異同が語られたのは他者についてであった。一方、考え方の違いが話題となったのは3人それぞれという本人（自己）についてであった。他者の内面の変化は語られることはなかった。他者の内面について語るということ自体が特別なことなのであろう。それが「変わった」と言うことも少ないのであろう。断片4で話題となったCの友人が「変わらない」と述べられたときに、容貌のみではなく、口調やふるまいなどを含む「風貌」についてのものであるとも聞かれた。対面して「変わらない」という印象を持つときには、その印象は容貌のみに基づくものとして聞かれないということだ。

同定と認識のあとの位置では、「なつかしい」という発話がなされることもあった。なつかしさ（ノスタルジア）を表明するものである（Davis 1979=1990）。「なつかしい、変わらない。」と続けて発話される事例も見られた。「変わらない」と同じ連鎖位置でなされるほかの発話との比較検討は今後の課題としたい。

昔の写真を見ることが「変わった」発話を収集する場面としてそれほど適するものではないということが明らかとなった。その場のタスクと組織に根ざしたアプローチが求められる。マルチモーダル相互行為分析を今後も継続していくことが有望である。

引用文献

- Arminen, Ilkka, 1996, The construction of topic in the turns of talk at the meetings of Alcoholics Anonymous, *International Journal of Sociology and Social Policy*, 16-5/6: 88-130.
- Davis, Fred, 1979, *Yearning for Yesterday: A Sociology of Nostalgia*, Free Press. (間場寿一・荻野美穂・細辻恵子訳, 1990, 『ノスタルジアの社会学』世界思想社.)
- Due, Brian L., Rui Sakaida, Nisisawa Hiro Yuki, and Yasusuke Minami, 2024, From embodied scanning to tactile inspections: When visually impaired persons exhibit object understanding, Brian Due ed. *The Practical Accomplishment of Everyday Activities without Sight*, Routledge, 154-179.
- Endo, Tomoko, 2018, The Japanese change-of-state tokens *a* and *aa* in responsive units, *Journal of Pragmatics*, 123: 151-166.
- Garfinkel, Harold and Harvey Sacks, 1970, On formal structures of practical actions, J. C. McKinney and E. A. Tiryakian eds., *Theoretical Sociology*, Appleton Century Crofts, 337-366.
- Goffman, Erving, 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall. (石黒 毅訳, 2001, 『ステイグマの社会学：烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房.)
- Goffman, Erving, 1974, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Harvard University Press.
- Handford, M., 1987, *Where's Wally?* Walker Books. (唐沢則幸訳, 1987, 『ウォーリーをさがせ!』フレーベル館.)
- Heritage, John, 1984, A change-of-state token and aspects of its sequential placement, J. M. Atkinson and John

- Heritage eds., *Structures of Social Action*, Cambridge University Press, 299-345.
- Jefferson, Gail, 2004, Glossary of transcript symbols with an introduction, Gene Lerner ed., *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*, Benjamin, 13-31.
- 串田秀也・平本 毅・林 誠, 2017, 『会話分析入門』勁草書房.
- 南 保輔, 1998, 「日本人」という公的社会的アイデンティティ: 帰国子女の「日本人」意識を考えるために, 『成城文藝』 161: 160-148.
- Minami, Yasusuke, 2007, Discourse of change among young Japanese sojourners: A case of "I've changed," 『成城文藝』 200: 278-256.
- 南 保輔, 2008, 徹子が黙ったとき: テレビトーク番組の相互作用分析, 『コミュニケーション紀要』 20: 1-76.
- 南 保輔, 2017, ターニングポイントはポイントではなくプロセスである: 薬物依存からの回復における「労役経験」, 『成城文藝』 240: 432-417.
- Minami, Yasusuke, Nisisawa Hiro Yuki, Mitsuhiro Okada, and Rui Sakaida, 2023, Two types of demonstration through guided touch with cane: Instruction sequences in orientation and mobility training for a person with visual impairments, *Human Studies*, 46(4): 723-756. DOI: 10.1007/s10746-023-09690-6
- Mondada, Lorenza, 2016, Conventions for multimodal transcription, https://franzoesistik.philhist.unibas.ch/fileadmin/user_upload/franzoesistik/mondada_multimodal_conventions.pdf. (2024年10月18日確認)
- Mondada, Lorenza, 2018, The multimodal interactional organization of tasting: Practices of tasting cheese in gourmet shops, *Discourse Studies*, 20(6): 743-769.
- Mondada, Lorenza, Sofian A. Bouaouina, Laurent Camus, Guillaume Gauthier, Hanna Svensson and Burak S. Tekin, 2021, The local and filmed accountability of sensorial practices: The intersubjectivity of touch as an interactional achievement, *Social Interaction*, 4(3): 1-30.
- Morita, Emi, 2005, *Negotiation of Contingent Talk: The Japanese Interactional Particles ne and sa*, John Benjamin.
- 森田 笑, 2008, 相互行為における協調の問題: 相互行為助詞「ね」が明示するもの, 『社会言語科学』 10(2): 42-54.
- Pomerantz, Anita, 1984. Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes, J. M. Atkinson and John Heritage eds., *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge University Press, 57-101.
- Sacks, Harvey, 1992, *Lectures on Conversation*, Basil Blackwell.
- Schegloff, Emanuel A., Gail Jefferson, and Harvey Sacks, 1977, The preference for self-correction in the organization of repair in conversation, *Language*, 53: 361-382. (西阪 仰訳, 2010, 会話における修復の組織: 自己訂正の優先性, 『会話分析基本論集: 順番交替と修復の組織』世界思想社, 155-246.)

付録1 トランスクリプトの記号

[	この記号をつけた複数行の発話が重なり始めた位置.
]	この記号をつけた複数行の発話の重なりが解消された位置.
=	前後の発話が切れ目なく続いている. または, 行末にこの記号がある行から行頭にこの記号がある行へと間髪を入れずに続いている.
(数字)	沈黙の秒数.
(.)	ごく短い沈黙. およそ 0.1 秒程度.
文字 :	直前の音が延びている. 「:」 の数が多いほど長く延びている.
文字 -	直前の語や発話が中断されている.
文字.	尻下がりの抑揚.
文字 ?	尻上がりの抑揚.
文字 ˊ	やや尻上がりの抑揚.
文字,	まだ発話が続くように聞こえる抑揚.
↑ 文字	直後の音が高くなっている.
↓ 文字	直後の音が低くなっている.
<u>文字</u>	強く発話されている.
° 文字 °	弱く発話されている.
@ 文字 @	アニメートするような声の調子で発話されている.
hh	息を吐く音. h の数が多いほど長い. 笑いの場合もある.
.hh	息を吸う音. h の数が多いほど長い. 笑いの場合もある.
文(h)字(h)	笑いながら発話している.
≡ 文字 ≡	笑っているような声の調子で発話している.
< 文字 >	ゆっくりと発話されている.
> 文字 <	速く発話されている.
(文字)	はっきりと聞き取れない部分.
()	まったく聞き取れない部分.
《文字》	データについてのさまざまな説明.
+	A の身体化された行為の記述.
*	B の身体化された行為の記述.
%	C の身体化された行為の記述.
* ->	記述された行為が後続の行に続く.
-> *	同じ記号のところで止まる.
a	その身体化された行為を行っている参加者は小文字で示される.

(Jefferson 2004; Mondada 2016; 串田ほか 2017; Arminen 1996)

付録2 断片付1

- 001 M: ええっと、どうでしょう。あそのあれですか。ちょっとさっきのはなしですけどやっぱ
002 り、いま会ってはなすのはそのじゃあ家族のこととか:
- 003 A: そうですねえ:
- 004 M: そういう仕事のこととか:
- 005 C: そうですね.
- 006 A: それはそうですね:
- 007 C: 直近. @さいきんど: お@とか.
- 008 B: 子どものこととかね.
- 009 AC: ん: :
- 010 M: ん: やっぱそういうことが多い, ですよ. ん: : .hhh ええっと、なんか、これまで
011 に人生の転機みたいなことがあったとか、今日話題になったとかありました?
- 012 A: 人生の転機.
- 013 M: 転換点.
- 014 A: () ?
- 015 C: 今日はならなかった.
- 016 B: 今日は話題にならなかったね.
- 017 A: ならなかったですね.
- 018 BC: ん: :
- 019 M: とくに、そういうの: を語るようなときって
- 020 C: なんか、え、みんなそれなりに知ってたからじゃない. 《右手で正面と左の2人を指し
て、最後に自分の胸のまえで止める》
- 021 B: hehehehe
- 022 C: 久しぶりっていうか、わ- 久しぶりっていうか、
- 023 A: あ: そうか.
- 024 C: その、あえて「言わなくても、
- 025 B: [@こんなことあったよ: @
- 026 C: もう知ってた
- 027 BCM: ん: : :
- 028 C: 状態だった (から)
- 029 B: でもなんかすご: い久しぶりに会ったひとにも:
- 030 M: ん:
- 031 B: なんか自分の転機についてはなすことはなさそう.
- 032 C: まあないよね.

- 033 M: ん:
- 034 B: なんか10年ぶりとかに会うひとに:@あたし, こんなことあって:人生変わっちゃっ
035 た@みたいな
- 036 A: あ::
- 037 B: 話題にはならなさそうじゃない.
- 038 M: うん.
- 039 B: こうまいとし会ってたりとかしたほうが:=
- 040 A: =そうそのつどはなしてるからね.
- 041 BM: ん::
- 042 A: みんな知ってるもんね
- 043 B: もんね.
- 044 A: なんか. huhuhu いろいろと.
- 045 M: なるほどねえ. え:ひとつはね. わたしま, ずっとそういう関心で:
- 046 A: ん:
- 047 M: あの@わたし変わったよね@とかそういう語りをする huhu データが、
- 048 A: ふ:::ん
- 049 M: あの:ha どうやったらあつめられるんだろうなと思って、
- 050 A: あ::
- 051 M: 最初に企画したんですけど::
- 052 A: あ::なるほどねえ.
- 053 M: あんまりでも、こういう場を設定してみても:
- 054 B: ん:
- 055 M: そういうはなしは出てこないし:
- 056 AB: ん:::
- 057 M: この:わたし自身いまメイン、メインっていうかね. あの、ま、こ:れ見ていただいた視
058 覚障害者の歩行訓練と:, .hh もうひとつあの、ヤク中さんの調査をしてるんですね.
- 059 ABC: ふ:::ん.
- 060 M: あの:ダルクっていう.
- 061 C: あ、はいはいはい. テレビで聞いたことある ()
- 062 A: あ:はいはいはい.
- 063 M: あ:はい. あるんですけども::、でそういうひとたちはやっぱりこう、クスリを使ってた
064 自分から、新しい生き方をする自分?
- 065 A: あ::なるほどね
- 066 M: を作っていくみたいなのが、非常に重要なので::、そういうことをよくおっしゃってる
067 んですけども:

- 068 C: たとえばわたしなんか質問されたら、@あ、人生の転機はね@ってこたえる、ことは
069 できる気がします。
- 070 M: ふ：ん。
- 071 A: ふ：ん。
- 072 M: でもやっぱり、とくに、ですね。ふつうにしゃべってるときは°とくに°
- 073 A: そうですね：：
- 074 B: 《左のAに向かって》お友だちとそういうはなしはあんましないかも？
- 075 M: あ：
- 076 B: 《右のCに向かって》むしろなんか職場のひととかで：
- 077 C: ん：ちょっと距離があるひと
- 078 B: ちょ、ちょっと距離があって：
- 079 A: ん：：
- 080 B: としも距離があって：。なんか、後輩とか、に：@わたしもこういうことがあったから：
081 頑張りなさい@とか
- 082 MA: あ：：
- 083 B: そういうときには：この例示として示すかもしれないけど：
- 084 M: なるほどね：
- 085 B: ちかしいと：そういうかんじはないかもしれない。
- 086 C: ん：：
- 087 A: けっこうなんか、おなじように、その転機を生きてきたっていうか、
- 088 M: ん：：
- 089 A: 自分が結婚したときも《眼の前のCを右手で指して》知ってるし、
- 090 BM: ん、ん。
- 091 A: とか、おたがいにね、
- 092 M: ん、ん、ん。
- 093 A: つねになんかそういうふうに、きてるかんじだからよけいにね、
- 094 B: ん、ん、ん。
- 095 A: いわないかもね。
- 096 M: なるほどね：
- 097 C: ん、ん。そうね。たしかに、初対面のひととかに-のほうが言いやすいかもしれない。
- 098 AB: ん：：
- 099 M: あ：：
- 100 C: もしかしたら。
- 101 B: ん：：
- 102 M: ほ：：なるほどね：

- 103 B: でそのひとがそういう情報を求めてたらとくにね。
- 104 C: ん, ん。
- 105 B: @じゃあ, こういうはなしあるよ@みたいなかんじで, いうかもしれないけど。
- 106 M: あ: : どうか. そういうときに語るものなんですかねえ。
- 107 A: ん: : : @どういうときに転機がありましたか@とか言われたら=
- 108 B: = hahahaha
- 109 A: @あ: そうね@ってなるかもね。
- 110 M: そうですね: .
- 111 B: ん: :
- 112 M: .hhh え: っとあとはなしは変わりますけど: , いま大学時代をふりかえってみて
- 113 どうですか.
- 114 A: なんか, どうでしょう. 青春してこなかったねっていう話なんだよね hahaha
- 115 B: hahaha もっと学校でね
- 116 A: そう.
- 117 B: 学校にかかわればよかったねっていう
- 118 A: 学校とあんまりね. たのしめばよかったね: みたいな. 文化祭の, あの前夜祭と後夜祭
- 119 も .hh @こんなのやってたんだね@とか言ってて hehehe ん: なんかドライだったなって
- 120 思いました°すごく°
- 121 C: なんかした, 学校の下からいっちゃっ, 上がったから,
- 122 M: ん:
- 123 C: なんかあらためて新しい .hh 人間関係とか,
- 124 AB: ん:
- 125 C: なんかそういうのを構築しようっていう意欲はそんなになかったかもしれない.
- 126 A: ん: : かもね.
- 127 M: あ: :
- 128 A: そうだね.
- 129 M: ふ: : : ん.
- 130 C: それがもしまったく別の, あ的环境に自分が .hh 大学1年から行ってたら:
- 131 B: たしかに:
- 132 C: がんばって: もっと学校になんかコミットしようとしたかもしれない=
- 133 A: =サークルはいろいろとかね.
- 134 B: ん: そこで関係を築こうとした: っていう.
- 135 A: そうだね: :
- 136 B: その4年間でね. ギュッとね.
- 137 ACM: ん:

- 138 B: なんかこう写真見てたら濃かったもんね hehehe
139 AC: ん: : :
140 M: あ: : :
141 B: われわれは中学から、ね、Cはもっと下からだから、その ZZZZ 生活としての
142 この濃度が、
143 C: ん: : :
144 B: ちょっとちがう
145 A: ん, ん, ん.
146 B: うん.
147 A: 大学とね、△△△△部だったんですけど、
148 M: あ: はい.
149 A: △△△△: 部の、あの距離が haha あの行き来してましたずっと.
150 M: あ: : :
151 A: どっちかにしか行かな辛かったけどね 辛 kyahahaha
152 M: あ: :
153 A: .hhh ね:
154 M: ふ: : ん.
155 A: で楽しかったかな.
156 B: ん.
157 A: ね. だよ. なにもかも.
158 《間隙》
159 M: その: もっとこんなことを学べたらよかったなとかありますか. 学生時代に学んでおけば
160 よかったなとか.
161 A: でもさっき B さん、B が、あのね、他学科の、他学科の授業もけっこうとってたって
162 いう =
163 M: = あ:
164 A: あ: なんかそういうのもっと食欲に: 、やっつけばよかったなと思いました hahaha
165 M: ふ: : ん.
166 B: いそがしかったから、
167 A: もういそがしかったね.
168 B: 教職でいそがしかった.
169 A: そうですね、たしかに.
170 M: ん: : :
171 A: でもね: : : : まいにち学校来てたね 4 年も.
172 M: あ: :

173 A： 来てました。4年間。

174 B： バイトばかりしてました。

175 C： あそう？

M は、調査者の南である。

付録3 撮影およびデータ使用に関する承諾内容についての説明

- 1 この説明と承諾書は研究に協力していただいた方の権利を守るためのものです。
- 2 撮影時、いつでも撮影中止を要請することができます。
- 3 録音録画させていただいた内容につきましては、必要な箇所を文字または絵として書き写す予定です。文字として書き写したものではありません。協力していただいた方が特定されうる、人名、地域名、施設名などの固有名詞をすべて匿名にします。
- 4 画像と音声（映像データ）および、それを文字または絵として書き写したもの（二次的データ、以下ではこれらを一括して「データ」と呼びます）は、研究・教育の目的に使用し、それ以外の目的には使用いたしません。また、データにつきましては、ご協力いただいた方がすべての権利を留保するものと理解します。
- 5 データは、「思い出おしゃべり研究グループ」に属する研究者のみが管理し使用します。「思い出おしゃべり研究グループ」とは、南 保輔および、将来において南とともに研究・教育活動を行なう研究者・大学院生・学部生を指します。

「思い出おしゃべり研究グループ」

南 保輔（成城大学）

- 6 「撮影およびデータ使用に関する承諾書」のうち、4以降の項目について承諾していただける場合は、姓名のいずれか片方の署名あるいはイニシャルを①②③④などの下線部にお願いします。出来るだけ多くの項目について、承諾していただけますようお願い申し上げます。

お問い合わせ先

《省略》

付録4 撮影およびデータ使用に関する承諾書

- 1 思い出おしゃべりの場면을撮影することを承諾しました。
- 2 今回録画録音した記録ファイルを、研究・教育を目的として、「思い出おしゃべり研究グループ」に属する研究者が管理・分析することを承諾します。
- 3 学術論文等本研究成果の発表を目的とした出版物、学会・研究会、授業、講演会での提示資料（パワーポイント等）と配布物において、今回のデータを文字として書き写したもの、および（容姿による個人の判別の不可能な）加工された静止画（写真）もしくは画像のトレース（絵）の使用を、承諾します。

以上1から3のほか以下の項目のうち、署名（姓名のいずれか片方）をしたものについても承諾します。

- 4 今回のデータのうち、容姿による個人の判別の可能な静止画（写真）を、

学術論文等の出版公開物 ① _____, 学会・研究会 ② _____,

大学・大学院における授業 ③ _____, 一般向けの講演会 ④ _____,

において使用することを承諾します。

- 5 今回のデータのうち、音声を、

学術論文等の出版公開物 ① _____, 学会・研究会 ② _____,

大学・大学院における授業 ③ _____, 一般向けの講演会 ④ _____,

において使用することを承諾します。

- 6 今回のデータのうち、容姿による個人の判別の可能な動画を、

学術論文等の出版公開物 ① _____, 学会・研究会 ② _____,

大学・大学院に於ける授業 ③ _____, 一般向けの講演会 ④ _____,

において使用することを承諾します。

上に示したとおり当該画像・音声データが使用されることを承諾します。なお、変更があった場合は、南あて（メールアドレス省略）に連絡いたします。

宛先：「思い出おしゃべり研究グループ」

日付 _____

本人署名 _____

Recognition of Persons and "Not Changed" Utterances: A Study of Talk Concerning Changes in Life

Yasusuke Minami (Seijo University)
yminami@seijo.ac.jp

ABSTRACT

Groups of adult women who had known each other since their school days were asked to have a chat while looking at their university graduation albums. The purpose was to investigate whether “turning points in life” were discussed, and if so, what form they took. In this paper, we report on the results of a session with a group of three women in their 40s. When looking at a photo of a mutual acquaintance, identification and recognition of the person were done at the point where new sequences began. It was assumed that the appearance of the person in the photo was compared with the “memory image” that was retained since their middle-school days. There was one case of an exchange concerning a change in “inner self,” but the expression “changed” was not used, and the comparison was made implicitly. In the interview after the session, the participants said that the situation in which they would talk about a big change was when they were consulted by a junior colleague at work. The result confirmed the difficulty of setting up a situation to collect natural occurrences of talk related to changes in life.

KEYWORDS: changes in life, "not changed" utterances, multimodal interaction analysis, memories, viewing photos